
ピアノソナタは永遠に

可愛 美琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピアノソナタは永遠に

【Nコード】

N9111V

【作者名】

可愛 美琴

【あらすじ】

姫野原学園高等部には、ピアノが上手いと評される三人の生徒が居た。

心に傷を負った、天才と言っても良い程にピアノが上手い、『藤杉紗菜』。

優しく明るい性格で、甘い物が大好きな紗菜の親友、『藤堂 留衣』。

温和な性格で、誰からも好かれる人気者、『佐伯 和真』。

紗菜を中心とした、その三人が繰り広げる学園物語。

紗菜とピアノを中心にしたお話です。

作者自身、余りピアノについての知識が少ない為、多少の手違いがあるかもしれませんが、ご了承下さいませ。

キャラ設定

主・登場人物キャラ設定

藤杉 紗菜ふじすぎ・さな：姫野原学園高等部の1年生で、留衣と同じクラス&mp;親友。見た目（外見）としては相当可愛い部類に入る。顔が小さくて瞳は大きく、スタイルが良い。ピアノが無茶苦茶に上手なのだが、ここ1年は弾いていない。というより、弾きたくないらしい。駿の幼馴染。

椎名 駿しいな・しゅん：相当な美形で、凄くカッコイイ部類に入る。紗菜よりも2つ年上の幼馴染で、元々は駿が紗菜にピアノを教えていた。コンクール等で優勝を収める程のピアノの上手さ。しかし、1年前に交通事故によって亡くなった。

藤堂 留衣とうどう・るい：姫野原学園高等部の1年生で、紗菜と同じクラス&mp;親友。活発で運動好き、というイメージのある女の子だが、意外と外より中の方が好きだったりする。すらりとした手足に、少し高めの身長。どちらと言えばカッコイイ系。ピアノを少しやっている。

佐伯 和真さえぎ・かずま：姫野原学園高等部の1年生。ピアノが上手い…と言っても、紗菜や駿に比べるとイマイチ（当たり前）。見た目（外見）としては、中の上ぐらいで、聞き手上手。明るい性格をしていて、偏見がなく優しい。

学校について

紗菜、留衣、和真が通う『姫野原学園』^{ひめのはらがくえん}は、私立の進学校として有名。エスカレーター式で、小等部、中等部、高等部と分かれている。生徒の約1割が外部入学。制服のデザインが良く、上品なイメージがある。

キャラ設定（後書き）

こんにちは、可愛 美琴です。

多分、学園モノ……だと思います。イマイチ、設定が決まっていな
いのです……

友情とか、そーゆうの……だと？w

まあ、楽しんで頂けたら有難いです。

第一章と第二章でまた違うキャラ設定が出てくるはず……多
分。

それでわーノノ

プロローグ

少女は今日もまた、ピアノの前に座って写真を眺める。

ピアノの上に置いてある、小さな写真。

花や、色んな物で飾られている。

その花は、少女の趣味だろうか。

部屋の中には、ピンク色や、花柄の物が沢山ある。

可愛らしく飾られた写真には、優しく微笑む少年が写っている。

その少女より、少し年上のような。

カッコイイ…相当な美形の部類に入るだろう。

まあ、その少女も相当可愛いのだが…。

少女はまだ少し薄暗い部屋で、悲しそうに写真の中にいる少年を見つめ、小さく呟く。

「会いたいよ、駿……………」

プロローグ（後書き）

こんにちは、可愛　美琴です。

コレは、前に少し書いて放っていたヤツです。

これからまた、執筆速度が遅くなります。まだまだ宿題が終わりそうにないので……。　（泣

まあ、頑張ります。

それでわーノノ

朝（前書き）

初めから更新遅れ……。。

朝

ピピピピ、ピピピピ……。

「うー…うるさあい……！」

目覚まし時計をバンスと叩いて黙らせると、もう一度ベッドに潜り込み、夢の世界へと落ちようとした、まさにその時。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪

明るく弾けるような音色があたしの携帯から響いた。
メモディ

あたしは1人1人違う音楽で登録しているから、間違いない。彼女だ。

その人物の顔を頭に思い浮かべながら、電話に出る。すると、予想通りの明るい声が聞こえた。

>> おはようっ！！ まだ寝てたの？<<

「……留衣^{るい}、うるさい……」

>> 何よう。せーっかく、人が起こしてあげてるのにーっ<<

この明るい元気な声の主は、藤堂^{とうどう}留衣^{るい}。あたしと同じ、姫野原^{ひめのはら}学園高等部の1年生。あたしより少し背が高く、キレイな顔立ちに明るく元気な性格。…と言っても、運動は苦手らしい。ピアノが好きで結構弾いているのだけど、中々上達できなくて焦っているとか。

>> ねー、紗菜^{さな}あ<<

……で、あたしは藤杉^{ふじすぎ}・紗菜^{さな}。姫野原学園高等部の1年生で、留衣と同じクラス。1年前までピアノをやっていて、コンクールで入賞したりとかもしていたから、中等部などの子達によく、“ピアノを弾いて”と言われるのが難点。……あのことがあってから、あたしはまだ、ピアノに触れていない。

>> さーなっ！ 聞いている？<<

「…あ、何？」

色々と考えていた所為で、何も聞こえなくなっていたらしい。

>>えっと、今、紗菜の家に着いたから。準備出来てるんなら、早く来て？<<

「ん、分かった。それじゃ」

ピッ、と電話を切って時計を見る。

ええと…今は7時30分。あたしの家から学校までは約15分程度で、遅刻とみなされるのは8時30分を過ぎたあたりから。十分間に合う。

「よし…っと。行く、かな」

黒色ミディアムの少しクセのある髪。制服の下小さなハートのネックレス。……よし、準備完了。

「…それじゃ、いってきます」

ピアノの上に置いてある写真にそう声をかけると、鞆を持って部屋を出た。

ガチャッ…。

「いってきます」

「いつてらっしゃい、紗菜ちゃん、留衣ちゃん」

お母さんが、玄関から手を振った。あたしも笑顔で手を振り返すと、留衣の元へ行った。

「おはよ、紗菜。ちよっと遅かったね？」

留衣は、あたしが来たことに気付くと、携帯を鞆にしまい、喋りながら歩きだした。

「ん…おはよお、留衣。え、アレでも遅かったの？ あたし結構急いだんだよ？ 留衣が急かすから、朝ご飯食べてないし……」

「あたしの所為かよつ。てか、急かしたつもりはなかったんだけど。寝坊した紗菜が悪いんでしょー！ ……ていうか、朝食食べてないんならコンビニ行く？ 時間十分あるし」

チラッと携帯で時間を確認する。

「んー…そだね、行こっか」

そう返事をする、目の前に丁度コンビニが見えてきた。

「今日は何にしようかなー」

隣で何故かはしゃいでいる留衣のことは放っておいて、店内へと入る。

ウィーン・・・という音がして、扉が開く。

店内へと入ると、留衣が速攻でケーキのところへと向かった。

「ちよつとー、留衣！ 今日位は少なめにしときなさいよーっ！」

返事がない。多分、聞こえていないのだろう。

あたしは、ふう…と溜息をつく、パンと紅茶を買って、留衣の居る所へと向かった。

留衣を見ると、ケーキを二つ持ってまだ品定めをしていた。

「……こら、留衣！」

持っていたケーキを取り上げると、きよとした顔で留衣があたしを見る。

「何よう、紗菜。ソレ、あたしのなんだけど……？」

「何、じゃないよ。もう少しでコンクールあるんでしょ？ そんなことしたら、折角^{せっかく}買ったドレスが入らなくなるけど、良いの？」

留衣は、今やつと思ひ出した、というような表情になる。

——もう少し押せば、いけるかな。

「ほらほら、どうする？ ケーキ食ってドレス入らなくなるか、ケーキ食べないであの“可愛い”ドレス着るか」

わざと、“可愛い”を強調して言ってみた。すると、

「……分かったよう。ケーキ、やめる…っ！」

簡単に引つかかってくれた。

「クス…。よしよし、いい子だね」

優しく留衣の頭を撫でると、ケーキを元の棚に戻してその場を離れた。

「…紗菜は、何買ったの？」

コンビニを出て、あたしがパンを取り出すと、留衣が聞いてきた。「クリーム入りメロンパンと、午後ティーストレートだよ」

ぴり…と袋を開けながら答え、まだケーキが恋しそうな留衣にメ

ロンパンを差し出す。

「食べる？ 半分」

さっきまで瞳がうるうるとしていたのに、その一言で一気に明るくなった。

「食べる食べる食べるうつ！！」

コクコクと頷き、同じ言葉を繰り返す。

「んじゃあ、はい」

メロンパンを半分に割って、クリームが多い方を留衣に手渡す。

「わあいつ ♪ 紗菜、ありがと ♪」

ニコニコと嬉しそうな顔でメロンパンを食べる留衣を見て、ふふつと微笑み、あたしも食べ始める。

「はむ…ん…ん…、ねえ、紗菜」

留衣が指に付いたクリームを舐め取りながらあたしを呼び、

「んく…んつ…何、留衣？」

あたしが紅茶を飲みながらそれに答える。

「あのさ、授業が始まるまで、レッスンに付き合ってくれない？」

レッスンというのは、ピアノ練習のことだ。

「ん、いいよ。コンクールまであと1ヶ月だっけ？」

「うん、そう。そうなんだけど、まだ全然でさ。だから紗菜が教えてくれるっていうのは、すごく嬉しい」

「お世辞はいらない。…で、今回は何にしたの？」

「えつとね…」

朝から部活のあるコしか普通はこんな早くに登校しない……とはやはり言い切れなくて。校門のところに、人だかりが出来ている。

その子達は、あたしと留衣を見て、目をキラキラと光らせた。

「留衣。ちよつと、覚悟しなきゃ。また出待ちされてる」

はあ…と溜息をつくようにそう言つと、留衣がククツと笑った。

「紗菜、やつぱりモテるね？ 女にも、男にも」

女のコとは別に、校門に寄りかかるようにして“誰か”を待っている数人の男の子を見て、留衣がはやしただる。

「ちょっと、ヤメてよ……。てか、それなら留衣でしょ、普通」

「んな訳ないでしょ。女のコは“ピアノ”、男のコは“告白”なんだから」

「朝からヤメてよ……」

はああ、と重い溜息をついた途端、中等部の女の子達（さつきまで出待ちをしていた子）に囲まれてしまった。

仕方なく、愛想笑いを浮かべる。ニツコリと、優しげに。

「ふ、藤杉先輩、藤堂先輩、おはようございますっ！ わ、私――

――」
「おはよう、桃実ちゃん」

目の前にいる女のコ、“桃実ちゃん”が、10回目ぐらいの自己紹介を始める前に、さっさと終わらせる。

「覚えていてくれたんですか……。っ！！ あ、あのっ。私、藤杉先輩のピアノが聴きたくて……」

留衣が、ホラね、というような表情であたしを見る。

あたしは、苦笑いを浮かべると、

「えっと……ごめんね。今日はあんまり、気分が良くないの。だから……また今度でもいいかな？」

そう言ってこの場を切り抜けようとする。だけど、

「あの……先輩、毎回そう言ってますか？ どうして弾いてくれないんですか？」

流石にこれ以上は無理らしい。

「……ッ。ごめん、ね。今日は、ホントに……ッ」

あたしは……。まだ、向き合う気にはなれないの……。
留衣もこれ以上は無理だと判断したのか、やっと間あいだに入ってくれた。

「ごめんねー、桃実ちゃん。今日は紗菜、気分悪いみたいだから、あたしでもいいかな？」

「……えっ！？ いいんですかっ！？」

「あたしだよー？」

あはは、と笑いながら留衣が受け答えをする。…と、話が終わったのか、留衣があたしを見て。

「それじゃー、紗菜。行こっか」

そう言うときあたしの手を取って、足早に校舎内へと入っていった。

「え……留衣？ どうなったの？」

校内に入ると、留衣に問いかけた。

「んん？ ああ、えっと、紗菜の代わりにあたしが弾くことになった。今日の、放課後」

「そっか。助けてくれてアリガト」

あたしがそう言うとき、留衣は不思議そうな表情をした。^{かお}

「紗菜、何も言わないの？ あたしが弾くこと」

あたしは、そんな留衣にクスツと笑いかける。

「そんなの、何も言わないよ？ ていうか、腕試しになるんじゃないの。次のコンクールまでに仕上げなきゃなんだし、ね？」

留衣はその言葉を聞いて、“うげっ”というような顔をする。あたしが言った言葉の意味が分かったようだ。

言葉の意味は、つまり—— “今日の放課後、あのコ達に聴かせるんだから、それまでに仕上げないとね？” である。

あたしは、留衣の表情を見てクスクスと笑いながら靴を履き替え、「ホラ、教室に鞆置きに行こ。レッスンは長い程良いんだから」

留衣に声を投げ掛ける。

留衣は、初めの一瞬だけ、少し拗ねたような顔をしたのだが、すぐに、

「うんっ」

と、返事をして、いつもの明るい笑顔を浮かべた。

朝（後書き）

こんにちは、可愛　美琴です♪
初めから更新遅れましたね…。

今回は、簡単な前置き…みたいなものです。
次もそうなると思います。

あと、少しでも過去の話入ります。

なので、駿が出てきます♪

…っと、ネタバレするので、これで終わりにしましょうか。

それでわ、また次回ーノノ

告白

ガラッ！

「おはよーっ！」

教室に入ると、留衣が真っ先に挨拶をした。

「留衣、紗菜、おはよー。留衣、朝から元気だねー？」

「藤堂、藤杉、おはよ」

あたしは、ニコツと微笑み、挨拶を返す。

「おはよう。ていうか、皆早いね？」

こんな時間だというのに、教室の半分はもう埋まっている。学校へ来るのには少し、早すぎやしないだろうか。

「いやまあ、見物、かな？」

「“見物”？」

クラスメイトが言った言葉に、少し引かかる。見物とは、一体何の“見物”なのだろうか？

「んーと……簡単に言えば、野次馬。告白して振られるところを見たくてさ」

言っている意味がさっぱり分からない。そういえば、さっきあたしと留衣に挨拶をした高橋くんが、何故かあたしをチラチラと見て

……？

「……？ 高橋くん、どうかした……？」

「えっ！？ い、いや、ななな何でもナイヨッ！？」

……すっごく、挙動不審。どうしたのかな、と思っていると――

「……あ、あのっ。ふ、藤杉っ！」

いきなり、肩をがしつと掴まれた。

はあ……こういうノリって、疲れるなあ……。さっきの桃実ちゃんだけで、もうお腹いっぱいだってば……。

「ん、何？」

出来る限り爽やかに。今思っていることを顔に出さないように。

「お、俺……っ」

やっと話し出してくれた。

「藤杉のことが好きなんだ！！ 付き合って欲しい！」

あーあ、やつぱり来たか。朝から暑苦しい話題。

今、完璧に告白されてるのに動じてない奴が一人。

ええまあ、あたしですけど。

「えっと……まず、手、離してくれるかな？」

ニコニコと表面上は笑いながら告げる。

「……え、あ、ああ、悪い」

あっさりと手を離してくれた。

「ふう……。で、何だっけ。あたしを好きなんだっけ」

は……と溜息をつくとき、他のクラスメイトが気づいたらしい。

あたしは今、機嫌が悪いということに。

「えっと……留衣、もしかして……？」

そのコが、留衣に確認を取る。

「……うん、桃実ちゃんが出来た。さっき“までは”機嫌良かったんだけど、このノリが2回目だから……」

それはつまり、かわらない方が身の為なのだ。

高橋くんの……いや、あたしと留衣以外のクラス全員の表情が一気に愕然としたものがくぜんに変わる。

あたしは、じっと高橋くんを見る。見つめる、じゃない。見る、だ。

「……じゃあさ……」

あたしが、また喋りだす。

「キスしてよ。今、この場で」

あたしのその一言で、周りが少し騒がしくなった。
でも、そんなの気にしない。気にして、いられない。

あたしは、高橋くんの首に腕を絡ませるようにして、体をぴったりとくっつける。

「ふ、藤杉……っ！？ な、何……」

顔が真っ赤になっている。あたしから少しでも離れようとしているらしく、腕の中でもぞもぞと動いている。

「ん……やあん。んもう、動かないでよぉ……」

わざと色っぽい声を出して挑発してみる。すると、“カチーン”という音が似合いそうな程に固まってしまった。

…コレはコレで面白いけど、やっぱり違う……。

……と、いきなり思い出した。

そう、いえば——…。

あれは、3年ぐらい前だったかな……。

ひめのはるかへんちゅう姫野原学園中等部の制服を着ているあたしと、はなむぎがくえんちゅう薔薇咲学園中等部の

の制服を着ている、“駿”。

その時あたしは、“駿”にピアノを習っている最中で——…。

…。

『あーもう！ 全ッ然出来なあいつつ！！』

と、部屋の床にごろりと寝そべったあたしを、

『ほらほら、大丈夫。ゆっくりやれば絶対出来るよ』

駿が、優しく起こした。

『……ね、しゅーんっ！』

きゅっ、とあたしが駿に抱きついた。

『ん、何？ 紗菜』

優しく名前を呼ぶ声が大好きだった。

『キス、してよ。ちょっとで、良いから』

今考えると、本当に無茶なことを言ったものだ。あたしのその時の立場は“妹”で、それ以上でもそれ以下でもなかったのに。その立場が変わることは、絶対にあり得ないのに。

だからあたしはずっと、“妹”として甘えていた。

ああやって抱きつくことも、全て。

“妹”として、だったのに。

駿だって、あたしのことを“可愛い妹”としか思っていなかった。それなのに――……。――。

駿は一瞬だけ躊躇^{ためら}って、あたしの唇に、

……小さく、キスをした。

唇を離したら、少し照れたような、困ったような表情で微笑んだ。あたしは、その一瞬の接触^{キス}と、はにかんだような微笑みが、今でも忘れられない。

否、忘れることが出来ない。

それだけは、絶対に忘れない。

あたしの、大切な大切な駿との“思い出”として、記憶されている。

……そう、そうだ。

どうして、こんな大切なことを忘れていたの。いや、違う。忘れてなんかいない。ちゃんと、はっきり覚えてる。

それならあたし、どうして――……。そこで、やっと気がついた。

あたしは、駿さとしの代わりを探していたんだ。

「……………ッ!？」

声にならない声が漏れる。

そう、あたしは、“駿さとしの代わりをしてくれる人”を探していた。

「嘘……………嘘よ……………」

バツ、と高橋くんから離れる。

皆の表情が変わる。

好奇の視線が、驚きへと。

「紗菜……………」

留衣が不安そうな声であたしを呼ぶ。

「あ、あ……………。あああ……………っ!！」

あたしは、走り出した。

教室を出て、屋上へと走る。

「紗菜!？」

留衣があたしを呼ぶ声さえ、耳に入らない。

バンッ、と、屋上の扉を開けた。

告白（後書き）

こんにちは、可愛　美琴です♪

何か……話が進みませんねえ。

まだ、ピアノが出てきてないし。

うーん……次、頑張ってみます。

それでわ、また次回ーノノ

逃げ出す

パタパタと無茶苦茶に走って、屋上に出た。

ただただ、現実から目を背けたくて。

皆を置いて、飛び出してきてしまった。

「……はあ……。こんな自分、嫌になる……」

そう呟いて、フェンスに寄りかかる。カシャン、という音がした。

「……まだ、一年なんだけど……。早すぎる、かなあ？」

空を見つめて、呟く。まるでそこに、駿がいるとも言つかのうに。

ふっ、と自虐的に笑って、次の瞬間には、優しいような哀しいような微笑みが浮かぶ。

「……逃げ出して、きちやった。高橋くんには、ちょっと悪いことしちゃったな」

ニコニコと、空に向かって。

駿と、話しているかのように。

と、その時。

「紗菜、ダメえっ!!」

いきなり、扉の方から大声が聞こえ、振り向く間もなく、後ろから抱き締められた。その衝撃で、倒れそうになる。

あたしを抱き締めてきた人物の、ぎゅっ、とあたしを抱くその手が震えているのが分かる。

あたしには、すぐに誰かが分かった。

「……留衣」

後ろを振り向く。そこにはやっぱり、留衣がいた。

凄く哀しそうな、泣きそうな顔をして。

「どうしたの？」

ニツコリと笑って留衣に問う。

返事なんて、何もない。でも、まだあたしを抱き締めているということで、全てを物語っているようなものだ。

「……あたし、死んだりなんかしないよ？ 留衣が思っているようなことは、何もしない」

留衣の顔が、安堵の表情に変わる。

クスッ、とあたしは笑うと、留衣を抱き締めた。

ぎゅううう、と力強く。まるで、さっきのことを全て忘れたい、とでも言うかのように。

「さ、紗菜？」

留衣の動揺した声が届くけど、あたしは無視して抱き締め続けた。そして、いきなり留衣を離すと、ちゅっ、と留衣の頬にキスをした。

「……………ッッ！！？」

留衣の顔が、真っ赤に染まる。

——可愛い、と思った。

あたしは携帯を取り出すと、何の躊躇ためらいもなく、

カシヤッ

という機械音を響かせて、留衣のその表情を写真に収めた。

「な、なな……っ!？」

あたしは、クスクスと笑って、

「留衣、アリガトね？」

さらっとお礼を言った。

……でも、どちらの礼なのかが分からない。

あたしを追いかけて来たことに対してのことが、写真のことが、自分でも、よく分からない。

「それじゃ、留衣。レッスン行こっか」

さらりと話題を変える。

「あ、うん。そ、そうだね」

明らかにまだ動揺してる。それが凄く面白かったから、もう少し苛めてみた。

「……留衣……」

色っぽい声で留衣を呼び、きゅっ…と優しく抱き締める。

「あたし……留衣のこと……」

潤んだ瞳で上目遣い。色っぽい表情で留衣を誘う。

留衣は、こういうのに弱いんだよね…」

凄く楽しくなってきたあたしは、その表情のまま留衣の唇に自分の唇を近づけていき――。

「……何やってるの？」

いきなり邪魔が入った。

あたしは、留衣に絡みついたまま、声がした方を見る。

そこには、クラスメイトが数人。中には、高橋くんもいる。

「へえ…。そっかそっかあ。紗菜は百合レスだったんだね……？」

あーあ、誤解が生まれてしまった。

あたしは留衣から離れると、

「違う違う。ちょっと、留衣の反応が面白くて……」

そう言った途端、隣から物凄い視線が。

「……………紗菜、あたしのこと面白がってたんだ…？」

「い、いや、そのお……」

「問答無用。携帯出して」

携帯？ 何で携帯……。

「え？ な、何で……」

「出しなさい！」

命令口調で言われてしまったからには仕方ない。

渋々携帯を取り出すと、留衣に渡した。

留衣は、カチカチと何度か操作をすると、目当ての物を見つけた

らしく、何故かあたしにその画面を見せてきた。

「コレ、消すね？」

留衣があたしに見せてきた物。それは、さつき撮った、“頬を赤く染めた留衣”の写真だった。

「ええっ!？　そ、それだけは……っ!！」

留衣は、ニヤリと笑うと、

「い・や」

と言つて、あたしの目の前で写真を消去した。

「ああ……。あたしの留衣がああ……」

がくつ、とその場に膝をつく。

アレ、滅茶苦茶可愛かったのにいい……。

……と、留衣が何かを見つけたらしい。

「……あれ？　紗菜、このヒト誰……？」

顔に疑問符を浮かべながら、ゆっくりとあたしに携帯の画面を見せてきた。

そこに映っていた物。それは——柔らかな笑みを顔に浮かべながらも真剣にピアノを弾く、

……駿の姿、だった。

「——……ッッ!？　触ら、ないでッ!！」

あたしはそう叫び、留衣から無理矢理携帯を取り上げた。

「紗菜？」

留衣の、動揺した声が耳に届く。

彼氏とかそういう軽々しい物じゃないことは、あたしの乱れっぷりで分かっているはずだ。

そんな、軽々しい物じゃなく——あたしの、この世で一番、大切なヒト。

あたしは、何度が深呼吸をして意識自体を整えると、留衣をじつと見つめ、優しく微笑んだ。

「……留衣。音楽室、行こっか」

留衣は、驚いた表情であたしを見つめた。

「……留衣にね、聴かせたい物があるの」

きょとん、とした表情。

「……だから、音楽室、行こ？」

留衣は、コクン、と頷いた。

逃げ出す（後書き）

こんにちは、可愛　美琴です。

今回も、和真が出てきませんでしたねえ……。

いやまあ、こんな気もしてたんですが。

という訳で、和真が出てくるのは次回になりそうです。

それでわ、また次回～ノノ

少年

屋上を出て、留衣と一緒に音楽室へと向かった。

「……留衣」

何？ と首を傾^{かし}げて留衣があたしを見る。

「……留衣、次のコンクールで弾く曲、シューベルトの『鱒』^{ます}だよ
ね？」

「そうだよ。それが、どうかした——」

留衣の声が、途切れた。

気が付けば、もう音楽室に着いていたらしく、中から音色^{メロディ}が聴こえて来る。

♪♪♪

誰かがピアノを弾いているらしい。

……綺麗な、音色。

あたしは勿論、留衣だってその曲を聴いたことがある。

……と、音が一つ、外れた。

「ああ……また間違えた。やっぱり難しいなあ……」

男の子の、声。

——駿にまでは及ばないけど、結構上手い。

そう、思った。

ガラリ、と音楽室の扉を開ける。

ピアノを弾いていたのは、一人の男の子——。

あたしも、よく知っている子だった。

「……佐伯、くん？」

「……藤杉、さん？」

見事にハモった。

佐伯くんは、きょとん、とした表情であたしを見てくる。

——佐伯 和真。皆からの人気者で、周りによく人だから出来ていたりする。女子からも男子からも好かれるタイプの子で、偏見が無く、誰にでも明るく接していくのが特徴。でも、女子から好かれる、と言っても、それは“友達”までで、それ以上になることはあまり無い、という男の子。

「どうして佐伯くんが、ここに……？」

「どうして藤杉さんが、ここに……？」

今度もまたハモる。

何度も同じ言葉が繰り返されるから、あたしは、はあ…と薄く溜息を吐くと、無理矢理話題を変えた。

「…佐伯くん、ピアノ弾けるんだね」

やんわりとした微笑みが佐伯くんの顔に浮かぶ。

「うん。まあ、少しだけね」

“少し”？ あれが“少し”な訳無いでしょ……。

大体、留衣と同格位かもしれない。留衣も意外と、結構弾けるからね……。

「さっきの、シューベルトの『鱒』^{ます}でしょ？ 凄い、上手いじゃん！」

留衣が褒めたてる。が、当の本人は、

「うーん……。僕としては、あんまりなんだよね。いつも同じところを間違えちゃうし」

「ああ、さっきの？ 音が一つ、外れてたよね」

うん、と佐伯くんが留衣に頷く^{うなづ}。

「……じゃあさ、留衣が弾いて見せてみたら？ どうせ、次のコンクール課題はソレだし」

簡単な提案をすると、留衣が急に、ええー……と呟いた。

「ホラ、早く弾く！」

「はあーい……」

無理矢理、留衣を説得した。

留衣は、椅子に座ると、すう……と小さく深呼吸をした。

これは、あたしがこの前教えた物だ。

留衣はすぐに緊張するから、その時は深呼吸して見て、って。小さいことだが、これが結構効くのだ。

…と、留衣の表情が真剣な物に変わる。スツ…と長い指を鍵盤けんばんに乗せ、ゆっくり弾き始めた。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

佐伯くんとは少し違っているが、これはこれで良いだろう。

優しく綺麗に、そして少し儚いような雰囲気で弾く佐伯くんとは違い、明るくも優しい、しっかりとした雰囲気だった。

綺麗…と、佐伯くんが小さく呟く。

ええ、とつても綺麗でしょう？ 留衣の、ピアノは。

まだ荒削りだけど、あと何年か経てば、ほぼ完璧になるはず。

…と、少しミスが出た。

「……あ、間違えた？」

留衣が、自分の間違いにすぐ気付いた。

「ちよつとミスが多いよ、留衣。もつともつと減らさなきゃ」

「うん、分かった」

よし、素直。

「……藤杉さんも、ピアノ弾けるの？」

唐突にそう聞かれた。

その疑問に、留衣が答える。

「そうそう、紗菜も弾けるんだよ！ ……そうだ、今度は紗菜が弾いてよ！ あたし、紗菜が弾いてるとこ見たことないんだけど」

「……え。どうして、あたしが弾かなきゃいけないの……」

あたしの意見は完璧に無視で、佐伯くと留衣が無理矢理あたしを椅子に座らせる。

「ほらほらっ！！」

はあ……これは、仕方ないの……？

あたしは、ピアノにほぼ1年間触れていなかった。

指が、少し震える。

弾くのが少し怖い、と思う。駿の曲が、頭に響くから。でも、これを逃したら一生弾けないんだ、とも思う。あたしはやっぱり、ピアノが大好きだから。

あたしは、ゆっくりと鍵盤けんぱんに指を乗せた――。

少年（後書き）

こんにちは、可愛　美琴です。

やあつと和真が出てきましたねー。

ピアノもやっと出てきましたし。

これからですよ。

ええ、これから大変になるのです……！
頑張らなくてはっ。

それでわ、また次回ーノノ

涙（前書き）

更新遅れました……。
申し訳ありません。

涙

ゆつくりと、鍵盤^{けんばん}に指を乗せる。

1、2、3。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

弾きながら、駿から言われた言葉を思い出した。

——『ピアノで一番大切なことは、“自分がどれだけその曲に感情を入れるか”だよ。』

感情を入れなければ、誰にも、自分の想いは伝わらない。でも、感情を入れれば入れる程、自分の想いが聴き手に伝わる。

感情の籠^{こも}っていない曲なんて、誰も、聴きたいとは思わない』

その言葉が、酷く胸に響いたのを憶^{おぼ}えている。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

「Die Forelle In einem B?chlein
he lle……」

ピアノを弾きながら、歌った。

佐伯くんと留衣が、驚いた表情であたしを見つめるのが分かった。

「Dascho? in froher Eil Die la
unische Forelle Vor?ber wie ei
n Pfeil……」

“明るく澄んだ川で 元氣よく身を翻^{ひるがえ}しながら 気まぐれな鱒^{ます}が
矢のように泳いでいた。……”

多分、訳としては、こうだったと思う。

あたしは小さい頃から、ピアノを弾きながら歌うことが大好きだった。

駿だけがピアノを弾いて、あたしがそれに合わせて歌う、なんてこともしばしばあった。とても、楽しかった。

でも――……。

そこで、指が止まった。

きつと、あたしは知らず知らずの内に、曲を全て弾き終えていたのだろう。

スツ……と、鍵盤から指を離す。

パチパチパチ……と、何処か控えめな拍手の後、いきなり、拍手の音が大きくなった。

その後、歓声。

『ワアアアア!!』

『凄い、綺麗な音色……』
メロディ

『もう一回弾いてよっ!!』

『歌声、凄く綺麗……』

そんな歓声に驚いて扉の方を向くと、何故か、観客が沢山居た。

「えっ……え？」

どうして、こんなにも人が集まっているんだろう。あたしには、何が何だか分からない――……。

「紗菜のピアノと歌声が、皆に聞こえたんだと思うよ。だってホラ、窓全開だし」

留衣が、明るく言った。

……ちよつと待て。さっき留衣は、何て言った？

“ 紗菜のピアノと…… ”

そこじゃない、もっと後。

“ だってホラ、窓全開…… ”

そうだ、そこ。

……窓が、全開？

目線を、窓へと向けた。

初め入って来た時には開いてなかった窓が、今は全開に開け放されている。

「……留衣……。アンタの所為せいでしょ……」

低く低く、そう呟いた。

留衣の体が、ビクツと飛び上がる。

「だ、だって……。音、綺麗すぎて……」

あたしは、はああ、と溜息を吐くと、椅子から立ち上がった。

「え……。っ。もう、弾かないの？」

「……どういう意味？」

質問を質問で返す。ある意味、面白い図だ。

『もう一回、弾いて下さいっ！！』

『藤杉先輩っ！ お願いですっ！』

何故か、中等部の子達まで来ている。

「僕も、もう一度聴きたいな。藤杉さんの、ピアノ」

佐伯くんまでも。

「……もう一曲だけ、だよ」

はああああ、と重い溜息を吐きながらも一度椅子に座り、鍵盤に指を乗せた。

すう……と息を大きく吸い込み、ゆっくりと吐き出した。

弾く曲は、もう、決まっている。

駿が、大好きだった曲——シューベルトの、『アヴェ・マリ
ア』だ。

1、2、3。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

ピアノの音と同時に、ゆっくりと歌いだす。

「Ave Maria! Jungfrau mild, Erh
ore einer Jungfrau Flehen,……」

駿のピアノに合わせて、歌ったあの頃。

また、隣で歌いたい。駿の、優しくて温かいピアノの音に包まれて。もう一度、歌いたい。

でもそれは、絶対に叶わない、幻想ユメでしかない――。

「Aus diesem Felsen starr und wild Soll mein Gebet zu dir hin wehen……」

駿のピアノが、頭に響く。優しい優しい、音色メロディが流れ出した。

周りに居る皆が、ハッと息を呑んだ。

あたしの頬を、何かが伝って落ちて行く。

「Dul?chelst, Rosend?fte wehen
ludieser dumpfen Felsenkluft,
……」

~~~~~

柔らかい、音。

幸福感で、満たして。

幸せな感情で一杯にして。

そうして、歌え。

そうして、弾け。

でも今のあたしには、それが出来ない……。

「Der Jungfrau wolle hold dich  
neigen, Dem Kind, das f?r den  
Vater fleht……」

駿、駿、駿。

もう一度、会いたい。

「Ave maria!」

そして、歌い終えた。弾き、終えた。

スツ……と、鍵盤から指を離す。

チラリ、と留衣を見ると、留衣の瞳から、ポロポロと涙が溢れていた。

あたしは、驚いて周りを見渡した。何故か、殆どの子が瞳を潤ませるか、留衣のように涙を零すかしていた。

佐伯くんが、あたしの瞳から涙を拾った。

—— 小さな小さな、雫。

あたしは、泣いてたの……？

佐伯くんが、自分の指に載った雫を見ながら、小さく声を発した。

「藤杉さんのピアノ、それと歌声、とても綺麗だったよ」

ゆつくりと、顔を上げる。

…… 佐伯くんの瞳は、哀しみに満ちているみたいだった。

—— でも、あたしにはそれが、とても綺麗に見えたんだ。

「とても、綺麗だった。でも、何処か哀しげで、寂しげで……」

僕にはまるで、誰かに会いたがってるように聴こえた。寂しくて

寂しくて仕方ない、と言ってるように聴こえた。

…… ねえ。藤杉さんは、歌ってる時、誰を思い浮かべてたの？

誰を想って、歌ってた？ 誰を想って、ピアノを弾いてたの？

藤杉さんの歌声は、悲しみに満ちてる。どうしてか、教えてくれないかな……？」

…… なく、綺麗な瞳。

とてもとても、哀しそうな瞳で、佐伯くんはあたしに問うた。

…… なく、綺麗な瞳。

哀しそうなのに、その感情の奥底は、とても温かい。

優しさに満ちた、哀しそうな瞳。

…… あたしに、対しての、優しさ。哀しさ。そのどれもが、あた

しには勿体無く思えた。

哀しそうなのに何処か温かい瞳が、あたしには凄く遠い存在のよ

うに思えた——。

## 涙（後書き）

こんにちは、可愛　美琴です♪

やっとの更新です。凄い遅れました。

申し訳ありませんでしたm（　　）m

てか、駿の好きな曲が『アヴェ・マリア』って……。

宗教曲じゃないですか。

一般人で宗教曲が好きって……ちょっと、変わってますねえ。

いやまあ、何を好きになるかは勿論、個人の自由なのですけど。

和真のキャラが……。何か……微妙に壊れて来たような……。

早すぎませんか？　まだ、登場して二話目だったのに……。

今回は、留衣視点となります。

この「涙」を留衣から見た、という感じになりますので、殆ど同じ場面です。

ご了承下さいませ。

それでわ、また次回お会いしましょうーノノ

## 涙 — 留衣視点 —

紗菜が、ゆつくりと鍵盤<sup>けんぱん</sup>に指を乗せた。

♪♪♪♪♪

少しでも声を出したら壊れてしまいそうに、儚い音だった。

優しくて、滑らかな音色<sup>メロディ</sup>。

とてつもなく、綺麗だと思った。

♪♪♪♪♪

「Die Forelle In einem B?chlein  
helle……」

優しく、小さく、紗菜が歌いだした。

驚いた。前から、紗菜の声は綺麗だとは思っていたけど、まさかここまでとは思わなかった。

プロ、と言っても充分だろう。

鈴が転がるように綺麗な声に、少し見惚<sup>みと</sup>れてしまう。

「Dascho? in froher Eil Die la  
unische Forelle Vor?ber wie ei  
n Pfeil……」

あたしは、それと同時に、紗菜のピアノの上手さ、そしてその歌唱力に——ゾッと、した。

あたしなんかとは、“上手い”の次元が違う。

紗菜は、“天才”だ。

……神様は、不公平だと思う。紗菜には、ピアノと歌の力を捧げた。でもあたしには、何も——……。

あたしは、紗菜のように天性の才能がある訳じゃない。だから、

自分の努力で、紗菜と同じ所に立たなければいけない。

——スタートライン位、同じでも良いでしょう？

……と。周りから、拍手が上がった。

何時の間にか、曲が終わっていたらしい。

あたしも、少し控えめな拍手をする。そつと、小さく紗菜の表情を窺うが、嬉しそうな色が何一つ浮かんでいない。というより、逆に——悲しそうな。悲しそうな中に、小さい疲れが過ぎって、どうして、と思った。

とても、完璧な演奏をしたのに。皆からこんなにも拍手を貰って、凄く綺麗な演奏、凄く綺麗な歌声だ、と褒め称えられているのに。どうして紗菜は、こんなにも悲しそうな表情をするの——？

「えっ……え？」

紗菜は、今やっと観客が居ることに気付いたらしく、戸惑いの声を上げた。

「紗菜のピアノと歌声が、皆に聞こえたんだと思うよ。だってホラ、窓全開だし」

悲しそうな表情をしていたことに、紗菜は全く気付いていないようだったから、あたしも、わざと明るく言った。

紗菜は一瞬、きょとん、としたような表情であたしを見ると、すぐに視線を窓へと移した。そして窓が開いていることを確認すると、瞳に黒い影を描いてあたしを見た。

「……留衣……。アンタの所為でしょ……」

低く低く、そう呟く声が耳に届いた。

ビクツと、あたしは小さく飛び上がった。

「だ、だって……。音、綺麗すぎて……」

これは本当のことだし、窓を開けたのもあたし。紗菜のピアノを聴きに来た人達から褒め称えられたら、紗菜はどんな反応を示すんだろう、と思つて半分無意識に開けてしまった。

紗菜は、はああ、と小さく溜息を吐くと、椅子から立ち上がった。  
「え……っ。もう、弾かないの？」

紗菜の表情がどうしてあんなに悲しそうだったのかが知りたくて、もう一度弾いて貰ったら分かるかもしれないと思って、あたしはつい、そう言っていた。

「……どういう意味？」

この時、紗菜はピアノを弾きたくないのかもしれない、と直感的に感じた。

紗菜の考えていることが、あたしには全く理解出来ない。

『もう一回、弾いて下さいっ！！』

『藤杉先輩っ！ お願いですっ！』

中等部の子達まで来ていたとは、流石に気が付かなかった。

「僕も、もう一度聴きたいな。藤杉さんの、ピアノ」

和真の一押しが効いたらしい。

「………もう一曲だけ、だよ」

はああああ、と重い溜息を吐きながら、紗菜はもう一度椅子に座って鍵盤に指を乗せた。

ゆっくりとした深呼吸。

紗菜は、何を弾くんだろうか。

紗菜の指が、ゆっくりと音楽を奏で始めた。

♪ } } } } } }

「Ave Maria! Jungfrau mild, Erh  
ore einer Jungfrau Flehen……」

曲の始まり方、歌の歌詞で、あたしは何の曲かに気が付いた。

これ……シューベルトの、『アヴェ・マリア』だ。

やっぱり、綺麗。

でも、何かが違う気がする。

「Aus diesem Felsen starr und w

ild Soll mein Gebet zu dir hin  
Wehen. ....」

紗菜の歌声をよくよく聴いて、気が付いた。

……とても、悲しそうだということに。

『アヴェ・マリア』は、幸福感に満たされた幸せで一杯な曲。  
でも、紗菜は……。

紗菜の歌声は、悲しみの感情で一杯になってる。

と……。紗菜の瞳から一筋、雫が流れ落ちた。

「Dul?che!st, Rosend?fte wehen  
ludieser dumpfen Felsenkluft,  
……」

~~~~~

紗菜は、悲しみの箆^{こも}った歌とピアノを、弾き続ける。歌い続ける。

紗菜が奏でたその音色^{メロディ}が哀しすぎて、あたしも涙を零した。

「Der Jungfrau wolle hold dich
neigen, Dem Kind, das f?r den
Vater fleht.」

紗菜は、誰かに向けて歌っているように聴こえる。

手の届かない場所へ行ってしまった人に向けて――。

「Ave maria!」

紗菜のピアノが、最後の音を紡いだ。

柔らかくも、優しい。

優しくも、悲しい。

優しいのに、とつともなく悲しくて。とても、儚くて。

そんな、雰囲気だった。

紗菜が、ピアノからゆっくりと指を離す。

そんな様子を見ながら、ポロポロとあたしの瞳から涙が零れ落ちて行く。

紗菜の居る所には絶対に届かないと、確信してしまったから。それなのに、悔しいとか、羨ましいとか、そんな感情は一切出て来ない。

今、あたしの中に在る感情は、ただ、“切ない”という物だった。紗菜のピアノで、紗菜の歌で、あたしは、もう会うことが叶わない人を思い浮かべてしまったから。

紗菜のピアノに感動した。それだけで、勝敗は決まっている。でも。

そんなこと、もう、どうでも良い。

紗菜は紗菜、あたしはあたし、なのだから――。

涙 ― 留衣視点 ― (後書き)

こんにちは、可愛 美琴です。

というより、お久しぶりです！(・ω・)

今回は、前回の『涙』を留衣から見た、ということでしたが……。これがまた、時間かかりました。凄く……ハイ。凄く、です。

でもまさか、留衣にあんな感情があるとは思いませんでしたね。

“神様は不公平だ。紗菜には、ピアノも、歌声も捧げたのに。あたしには、何も――”

って部分。

これって、ただの妬みな訳なんですよね。

留衣は、“天才”の紗菜が羨ましい。

そういうことでしょう。

……とと、あとがきまで長くなりそうなので、これにて失礼致します。

それでわ、また次回ノノ

過去

佐伯くんが、あたしを見つめる。

……言わなきゃ、駄目なんだろうか。

それにしても、どうして今日なんだろう…。

「……藤杉さん」

佐伯くんが優しくあたしを呼ぶ。

「……かんけい、ない……」

「……え？」

か細い、無理矢理出したかのような声があたしの口から零れた。

「佐伯くんには、関係…ない…でしょう…？」

そう、呟いた瞬間。一瞬だけ、本当に一瞬だけ、彼の優しげな瞳が、小さく——歪んだ。

「……関係ないよ」

小さな、辛そうな声。でもやっぱり、温かく聞こえるのはどうしてだろう……？

「僕には、全く関係ない。だけど——」

「分かっているのなら、どうして関わろうとするの！」

佐伯くんの声を遮って、そう叫んだ。あたしの周りが——というより音楽室全体が——シン、と、静かになった。

はぁはぁ、と荒く息を吐いて、今まで溜め込んでいた気持ちを一気に吐き出した。

「佐伯くんには、分らないの！ あたしの気持ちなんて、何にも分らないのよ！ 好きな、大好きな人が隣から消えた、あたしの気持ちなんて！ 関係ない人に、上辺だけの瘡蓋かさぶたを付けた一生消えない傷跡を、抉られたくはない！！」

そう、叫んだ刹那。

「だから、何？」

佐伯くんは、冷たく、あたしを突き放した。

「だから、何な訳？」

もう一度、繰り返す。

「君、今言ったよね。“上辺だけの瘡蓋を付けた傷跡”って。上辺だけの物なら、必要ない。そういう物は、剥がさなければならぬ。君は、それを分かっているんじゃないの？ 分かっている、でも自分じゃ剥がせないから、自分で剥がすと痛いから、残しておいたんじゃないの？ ……誰かに、剥がしてもらいたくて」
なっ……。

「違う、違う違う違うっ！」

違う……っ、と、小さく小さく呟いた。

ふわり、と、誰かがあたしを抱き締めた。

——柔らかくて、スツキリとした甘い香り。

留衣の後ろから、佐伯くんの声が届く。

「……大丈夫、僕達が居るから。他の人に聞いてもらうと、まだ、楽にはなるから。一人で抱え込んで、これ以上守っても、傷は癒えないよ。さっきみたいに、心の中全部、吐き出したら良い——」
優しくて温かい、佐伯くんの声。

「……紗菜。全部言つてよ。もう、隠さないで良いから」

柔らかくて切ない、留衣の声。

切なさや哀しみに揺れたその声に、あたしの心の壁が、岩のようにガラガラと崩れ、砂のようにサラサラと消えていった。

「……言つて、も、良い……の……？」

声がか細く揺れる。

留衣が、そして佐伯くんが、ニコツと微笑んで頷き、

「言わなきゃ、楽になんないよ」「」

あたしに小さく、釘を刺した。

「……あたしには、ね。2つ年上の、幼馴染が居たの」
ゆっくりと、話し始めた。

「薔薇咲学園に通ってた、……椎名 駿しいな しゅんって、知らない？」

留衣はその名前を聞いても、キョトンとした表情であたしを見たけれど、佐伯くんは、“驚いた”という風に見開いてあたしを見た。

「椎名 駿！？ 勿論知ってるよ！ 薔薇咲学園に通ってる……というより、こんなにも近くに椎名さんの知り合いが居るなんて……！」
佐伯くんは少し、勘違いをしている。

「……佐伯くん」

あたしが呼ぶと、何？ という風に首を傾げた。

「駿は、今もまだ通ってるんじゃない。1年前……ううん、2年前までは通ってたの」

そう告げるのが今日だったことで、一番区切り易かった。
だって、今日は――。

「今日はね……駿の、二度目の命日なの」

今日は、駿が亡くなった日だから。

二人の表情が、一気に変わった。

「命日……！？」

佐伯くんが、驚きに声を上げる。

「そう……命日。駿が、あたしの隣から消えた日」

あたしの声を受けて、留衣の瞳に小さく涙が浮かんだ。

それを見て、あたしの為に――それか、ただ単に――悲しんでくれていると分かっているのに、

「ねえ……泣かないで、くれる……？ 同情で泣かれたって、あたしは一つも嬉しくないわ」

どうしても冷たく当たってしまう。

「あ……。ゴメン、なさい……」

留衣はそう呟き、瞳に浮かんだ涙を拭った。

あたしは、その様子をじっと見つめた。

「……話、聞かせて貰っても良いかな？　もし、藤杉さんが“嫌だ”って言うんなら、無理強いはいしないけど……」

チラリとあたしを見て、そう訊いた。

問い掛ける声には、初め程の強さが無い。あたしにも駿にも何の関係も無い赤の他人が、そこまで深入りして良いのかどうか迷っているのだろう。

初めだけ言つて、それ以上をまた隠すなんて、嫌。一つ言つたんなら、全て言う方が楽になるんでしょう？　彼方^{あなた}達は、あたしに今、そう教えたじゃない。

あたしは、薄く薄く微笑んで、口を開いた。

「……今日から丁度2年前の、11月14日。その日は、雨が降つてて——」

「……あ、駿——ッ！　遅いよ——ッ！」

「はあはあ……。文句言っんなら、自分で買いなよ……」

「ヤーダッ」と、あたしは答えて、駿に買って来て貰ったクレールを受け取った。

その日は、ピアノコンクールであたしが入賞したからそのお祝い、ということ、駿と遊園地^{デート}に遊びに来ていた。

「もう……。それじゃあ、次は何乗る？」

呆れたように笑いながら、駿があたしにそう訊いた時、

——ポツポツ……と、雨が降り始めた。

もしかしたらそれは、“早く家に帰れ”という警告だったのかも知れない。

でも、その時はまだ3時。それに小雨だったから、もう少し遊べ

るだろうと思つて、あたしは、駿に止められるまで——大体6時頃まで——いつまでも遊んでた。

そして、その帰り道——事故が、起きた。

行きは電車だったんだけど、帰りはゆつくりとバスで帰った。

その時、電車で帰っていれば、あんな事故に巻き込まれることは無かつたのかも知れない——と、

あたしがもつと早く家に帰っていれば、あんなことにはなら無かつたのかも知れない——と、今でもまだ悔やんでる。

11月だから、5時、6時頃には、もう辺りは真つ暗。

それと合わせるように、初めは小雨だった雨がどんどん酷くなつて、あたし達が帰る頃には大雨で前も見えないくらいだった。

だから、なのかもしれないが……。

雨だし、辺りも真つ暗だから、ゆつくりと安全運転なんだろう、つて思つてた。

でも、その予想は悉く裏切られることとなつた。

多分……運転手も、油断してたんだろう。

少し、うとうととしてしまった。

気が付いた時には、目の前に大型トラックが迫つて来ていて——。

——ドンツツ、という大きすぎる鈍い音と、窓ガラスが割れる、ガシャアンツ、という耳障りな音が同時に聞こえた。

あたしが、その状況を理解したのは、周りの叫び声だった。

『キヤアアア！！』

『早く……早く逃げろッ！！』

『嫌……お母さんッ！ 嫌あぁっ！！』

女性の悲鳴、男性の苦しい叫び声、子供の泣き叫ぶ声。

全てが、入り混じっていた。
そして――

『紗菜、危ないッ!!』

駿の声が聞こえ、あたしがその声に急^せかされるように上を向くと……大きく、鋭利に割れたガラスがあたしへ向かって飛び散って来ていた。

『――……ッッ!!』

ガラスが飛んで来る、その恐怖で、あたしは声が出なかった。

ガラスが、あたしに刺さりそうになった瞬間――駿が、あたしを守るように覆い被さった。

ザクリ、と、駿の背中にガラスが刺さる、鈍い感触があたしにまで伝わって来た。

『う、あ……ッ』

駿が、苦しそうに息を吐いた。

『駿……駿ッ!』

駿はあたしに覆い被さったまま、ジャケットのポケットへと手を入れ、可愛らしいリボンで丁寧に包まれた小さな箱をあたしに手渡した。

『紗菜……入賞、おめでとう……』

弱々しく微笑んで、あたしの頬を、血に濡れた手で優しく撫でた。

『駿、そんな……ヤダ、嫌だよ……っ』

あたしの頬を撫でる手を、あたしは両手で包み込んだ。

ふるふると首を振りながら、嫌だ嫌だと呟く声に、少しずつ涙が混じった。

『さ、な……。早く、逃げて……』

『ヤダよ……ッ。駿を置いて行くななんて、ヤダ……。あたし……駿が好きなの……大好きなの……ッ! これで最後なんて、嫌……ッ』

ボロボロと、大粒の涙が零れた。

駿の表情が、クシャツと歪んだ。

『僕だって…紗菜と、別れたくなんかないよ……ッ』

そんな声が聞こえたかと思うと、ポタポタ…と、あたしの頬へ雫が落ちて来た。

涙に霞む瞳で駿を見ると、何故か——駿も、泣いている。

『紗菜、紗菜、紗菜……！ ずっとずっと、一緒に居たい。離れたくなんかない。これで最後なんて、嫌だ……ッッ！』

ぎゅうっ、とあたしを抱き締めるその手には、殆ど力が無い。

『駿……ッ』

『紗菜……ッ』

ゆっくりと、あたし達はどちらとも無く唇を近づけて——

『ずっとずっと、愛してる……』

これで最後になるであろう、口付けを交わした。

過去（後書き）

こんにちは、可愛 美琴です。・・・）ノ、
最近は、凄くのんびり更新になって来ましたねえ。

さてさて…今回で、やっと紗菜の過去が明かされました。
と、言っても…細かい部分を明かしただけです。

大まかな説明だと、何度が言っているような気がします（・・ω・
、；）

何か…今回の最後らへん書いてると、自分でも書きながら泣きそう
になってきましたw

まあまあ、堪えましたけども。

それでわ…また次回。

お会いしましょうノノ

仮初の誓い

「あたし達はその後、救急隊員に助けられたんだけど、その頃にはもう、駿の意識は無くて……。病院で手当てを受けたけど、手遅れだった。」

刺さったガラスはね、肺を貫いてたんだって。手の施しようが無かった、って。

……駿は、あたしを庇って、死んだ。……あたしが、駿を殺したの。駿が死んだのは、あたしの所為なの……っ!!」

ボロボロと涙が溢れる。

「どうして……どうして、駿は！ あたしを、庇ったりしたのよお……ッッ」

今のあたしに、周りを見渡すほどの気力は無い。でも、留衣が泣いているということは分かった。

ぎゅっと、抱き締められる。

「椎名さんが亡くなったのは、紗菜の所為じゃない！ 紗菜の、所為じゃないよ……っ」

留衣の涙が、あたしの頬を濡らす。

「ふ、う……ッ。うわああー!!」

留衣の胸に顔を埋めるようにして、泣いた。

こんな風に泣き叫んだのは、久しぶりかも知れない。

ともだち
留衣に、抱き締めて貰って。

あたしの居場所、ここなんだって。

駿が死んでから、お母さんも、何処かよそそしかった。

駿のお母さんは、あたしを責めた。

アンタが駿を殺したんだ、って。

アンタが居なければ、駿はまだ生きていたんだ、って。

そして、気付いた。

あたしは元から、いない存在だったんだって。

駿を殺したのは、あたしなんだって。

あたしは、誰からも愛されてなかったんだって。

駿のお母さんは、あたしが駿と居ると、いつも嫌そうな、迷惑そうな顔をした。

駿が居るから、何も言っただけ。

もしかしたら、駿も？

駿も、あたしのことを邪魔だと思っていたんじゃないの？

あたしのことなんて、嫌いだったんじゃないの？

あたしが、そのことにいつまでも気付いてなかっただけで、多分、それが真実。

「駿はあたしの所為で死んだ」

「あたしは誰からも愛されてなかった」

「あたしは、いない存在」

「駿があたしを好きだって言ったのも、全て嘘」――。

……じゃあ、留衣は？

留衣は、あたしを友達だと本当に思ってる？

留衣の言葉は、全て、真実だと。

信じて、良いの――？

「……留衣」

掠れた声で名を呼んだ。

「……紗菜？」

涙に濡れた瞳で、優しくあたしの名を呼ぶ。

「留衣は、あたしのことを、どう思っているの？」

そう、訊きたいのに、言葉が出ない。

唇が上手く動かない。

目の前が、昏く霞む。

カラカラになった唇で、小さく小さく言葉を紡いだ。

「……留衣は」

留衣は、

「――あたしの友達？」

“あたしを本当に、友達だと思っていますか――？”

その言葉が、あたしの唇から紡ぎ出されることは無かった。

「……今更、だよ」

ぎゅうううつ、と、あたしを強く強く抱き締めて。

「そんなの、決まってるでしょ」

答えは一つしかない、とでも言うかのように。

「紗菜は、あたしの“親友”だよ」

――シンユウ？

否定でも、疑問でも、肯定でもない。

そのどれでもない、答え。

“友達”よりも、一つ上の存在。

シンユウ、と口の中で反復させる。

「うん、親友」

明るい笑顔で、優しい声で、留衣は告げた。

「“親しい友人”…或いは、“心の友”」

後者の方が合ってるかも、と、留衣は何処までも明るい笑顔で言った。

……あたしは。

留衣を、信じられる？

信じたいと、思える？

「……んじつ…とも」

「えっ？」

「……しんじつの、とも」

キョトン、とした表情で、留衣はあたしを見つめた。

そして、あたしが言っていることが分かったらしく、何故かニヤツと笑った。

「ふ、ふふ……っ。そっか、そっかあ。“真実の友”、ねえ」

口元に意地の悪そうな笑みを湛^{たた}えてそう呟くと、スツ——と、その面^{おもて}から、全ての感情が消えた。

「紗菜は、あたしを信じられる？」

——予想外の質問だった。

それは、さつきまで自問自答していた内容で、まさか留衣自身からその質問が返って来るとは思わなくて、一瞬、ピタリと動きを止めてしまった。

どうして、なんて訊かない。

それを訊いて、何になる？

何一つ、変わらない。

「紗菜は、あたしを信じる事が出来るの？」

“真実の友”、“真^{まこと}の友”。……ホンモノの、友達。

分からない、と答えるのが一番無難なのかも知れない。
現にあたしは、よく分かっている。

でも。

でも……。

「——出来るよ」

気が付くとあたしは、そう答えていた。

全て、嘘になるはずなのに。

「あたしは、留衣を信じられる」

だって、“真友^{しんゆう}”でしょう？ と微笑んで。

留衣は、じつとあたしの瞳を見つめていたが、すぐにニッコリと微笑んだ。

「あたしも、紗菜を信じられる。…あたし達は、永遠、だからね？」
誓って？ という風に、ニコツと笑った。
留衣が、右手の小指を顔の前に出した。
あたしも、右手の小指を顔の前に出した。
ゆっくりと、絡めた。

「あたし達は、永遠に“真友”であることをここに誓います——
——」

あたし達は、きつと嘘になるであろう、かりそめ仮初の誓いを交わした。

仮初の誓い（後書き）

こんにちは、初音ミクの『紡歌』聴き流し中の可愛 美琴です。

さてさて…今回は、何とも言えない展開になりました。

最後…バツサリと。

紗菜は、誰の事も信じられなくなった様子です。

留衣も、母親も、そして、駿までも。

これから、どうなるのでしょうか？

それでわ、次回をお楽しみに〜ノノ

エピソード

澄んだピアノの音が、夕陽に混じる。

眩しいまでに紅い夕陽と、柔らかに優しい音色^{メロディ}。

聴き惚れてしまいそうになる程、綺麗な音色が、いきなり、暗く沈んだ音色に変わる。

まるで、“誰も信じていない”という少女の心を代弁しているような音色。

誰のことも信じられなくなってしまった少女に、一人の少女がニコリと微笑み掛ける。

未だに彷徨い続ける少女と、その少女と誓いを交わした一人の少女。

少女はまだ、今にも消えてしまいそうに儚く淡い音色を奏でている。

エピローグ（後書き）

こんにちは、可愛 美琴です。

さて、今回で第一章が終了しました。

短かったですねー！

まあ、ドンマイなのです。

第二章に出すキャラ、頑張って考え中です。

それでわーノノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9111v/>

ピアノソナタは永遠に

2011年11月30日22時53分発行